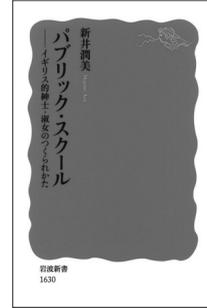


書 評

新井潤美著『パブリック・スクール
——イギリスの紳士・淑女のつくられかた』
(岩波書店、2016)



井上 美雪

イギリスのパブリック・スクールをテーマとした岩波新書といえば、一定の年齢以上の人の多くは池田潔著『自由と規律——イギリスの学校生活』を思い浮かべるだろう。1949年の刊行以来読み継がれてきたこの本は、岩波書店のHPに掲載されている文章を借りると、実際にパブリック・スクールで教育を受けた著者が「自由の精神が厳格な規律の中で見事に育まれてゆく教育システムを、体験を通して興味深く描いたことが特色であると言えよう(強調筆者)。対して本書は、著者自身、女子パブリック・スクールでの寄宿生活を体験しているもののそれについて紙幅は割かれず、むしろ一般に流布するパブリック・スクールのイメージに焦点を当てている。著者は、「パブリック・スクールのイメージが良くも悪くもイギリスの文化に深く根付いていることについて、それが何故なのかを考えてみたかった」(213)という思いから、広く小説、演劇、映画などを題材として本書を執筆している。

著者がパブリック・スクールそのものよりも、小説等で描かれたそのイメージに心惹かれたのは、それが自身の少女時代を形作る原点だったからであろう。記述から推測するに家族や親しい知人にパブリック・スクール出身者がいないように思われる著者がパブリック・スクールについて知り憧れたのは、イーニッド・ブライトンの「セント・クレアズ」や「マロリー・タワーズ」シリーズを通してであり、「いつしか「イギリスの寄宿学校」に行きたいと思うようになっていた」(211)そうである。機会を得て著者はチェルテナム・レイディーズ・コレッジに入るのだが、面白いのは、数々のパブリック・スクール物語で描かれた学校生活のイメージが寄宿生活体

験のさなかにおいても憧れられ、参照され、消費されている点で、生徒たちは、現実の体験と小説で描かれた学校生活が違うことを嘆きつつ、小説で描かれたイベントを実際に企画し楽しんでいたという(213)。著者のこの回想からわかるのは、小説等に描かれたパブリック・スクールのイメージが人びとを——香港のインターナショナル・スクールで学んでいた一生徒たる著者までをも——惹き付ける磁力の強さである。パブリック・スクールのイメージは、自らに触れたものをその実体に回収しようとする仕組みを備えているのである。

著者は、トム・ブラウンやアガサ・クリスティの作品など定番の小説から、今では忘れ去られた小説に至るまで、様々な媒体に描かれたパブリック・スクールのイメージを解明していく。関連する教育法や統計資料や専門書の紹介は最小限にとどめ、一般の人が目にしていたポピュラーな媒体に焦点を当てたことで、読者は当時の市井に生きる人たちがパブリック・スクールをいかに捉えていたかを追体験することが出来る。直接知人からパブリック・スクール体験談を聞くことが出来ない点では、50年前や100年前の読者も私たちも同じである。しかし、彼らが読んでいたものを読むことで、彼らの頭の中に作り上げられたイメージを私たちは共有できるのであり、それが本書の醍醐味となっている。

著者はこれまでにイギリス人の階級意識に焦点を当てた新書を著してきた(『階級に取りつかれた人びと——英国ミドル・クラスの生活と意見』中公新書、『不機嫌なメアリー・ポピンズ——イギリス小説と映画から読む「階級」』平凡社新書)。そうした著者らしく、本書においても広くミドル・クラスの人びとの階級意識に焦点が置かれている。というよりはむしろ、パブリック・スクールを描いた小説等について語る時にはそこは避けて通れないものである。第2章「『学校物語』とイメージの確立」で明らかになるのは、パブリック・スクールのイメージを喜んで消費していたのは、実際にはパブリック・スクールと関りのないロウワー・ミドル・クラスやワーキング・クラスの人びとであったという一種のねじれである。読者たちは、アッパー・ミドルに強く憧れ、学校物語を読むうちにその世界に入り込む。それはすなわち彼らの目を通して物語に(侮蔑的に)描かれた自分たちの姿を見る体験につながる。このことを著者はロバート・ロバーツの著作か

らひいて紹介している。「自分たちの学校には愛校心や中世を感じる事が出来なかったので、[フランク・リチャーズの学校物語の舞台となった]グレイフライアーズがわれわれの本当の母校となった。[中略]そして、この母校を敬愛する人間にとって、自分こそがグレイフライアーズの生徒たちからあんなにも軽蔑された「品のない男」の典型だと気づくと、奇妙なショックを覚えたものだ」(本書68より引用)。

パブリック・スクールが階級に関わる問題をむき出しにすることがあったにせよ、それを描いた物語が多数を占めるロウワー・ミドルやワーキング・クラスに読まれることで、パブリック・スクールが「真の紳士の形成場所」として理想化され、あこがれの対象となっていく」(73)ことになった必然性は、前述のように本書の原点である。私事で恐縮だが、筆者は古本で学校物語を求める際には、なるべくフロントページに書き込みや蔵書票があるものを買求めている。「ゴードンへ クリスマスを祝して 1926 エイダ・バージェスより」、「レイチェルへ 心を込めてお誕生日おめでとう イヴリン」、「キャロル・アレンへ 11歳のお誕生日に 1953年5月7日 ミス・バラードより」といった書き込みから、友人同士が学校物語を贈りあっていたこと、あるいは大人が子供に与えていたことがよくわかり、学校物語が子供からも大人からも承認を得ていた当時の状況が伝わる。中には、1916年にハリー・グッドマンという少年が日曜学校でクリスマスにもらった本を1939年に娘に贈り、それを娘が1946年にアメリカへ持参したという内容が記されているものもあり、世代を超えて読み継がれ大切にされてきたさまが理解できる。数々の書き込みをおつていくと、「ほんの一握りのアッパー・クラスおよびアッパー・ミドル・クラスの子弟が行くパブリック・スクールのイメージは、こうしてイギリス全体に大きな影響を与え、イギリス文化の重要な部分になる」(73)のだという著者に強く共感できる。

一方で、憧れだけでなく揶揄や批判もパブリック・スクール言説を形成していたことにも本書は触れている。第3章「理想の裏側」では、パブリック・スクールの体験を淡々と描写した結果、偽善や狡猾や体罰に満ちた閉鎖的・排他的な世界であったことを暴いた本が少なからずあったことも記されている。また、卒業生がパブリック・スクール時代を回想するとき、

ノスタルジアから理想化され肯定され過ぎている節があることが明らかにされている。この個所を読むと、例えば冒頭で紹介した池田潔の著書も、もしかしたら理想化されたイメージを伝えている例と言えるのかもしれないと思ひ至る。だが同時に、パブリック・スクールに対する憧れを人びとにもたらすという点では、(著書が紹介していたGathorne-Hardyが名付けた)「パブリック・スクールという現象」を実は日本に居ながらにして体験させる著作だったと言えることにも気づかされる。しかも現在のパブリック・スクールは、減少したイギリス人入学生に代わって2万4千人以上もの留学生を受け入れているだけでなく、彼らが往年のパブリック・スクールらしい排他性までも持ち込んでいる(第6章)ことを考えると、パブリック・スクールのイメージが持つ実体への回収の仕組みは、世界各国に共通してみられる現象であることがわかる。時代も国境も超えて、憧れの場としてのパブリック・スクールのイメージは人びとの意識に訴えかけ続けているのである。

本書の後半を占める第4章から第6章では、パブリック・スクールについて階級やジェンダーの視点から解明されている。個人的に興味をひかれたのは、女子校という空間に想像力を刺激された男性作家による女子校物語の存在である。これまで女子校物語を女子教育の枠組みで捉えてきた筆者にとっては、女生徒たちの物語が男子パブリック・スクール物語と重ねられて「男性性と女性性の両方を兼ね備えた独特の存在」(134)として捉えられ、男性作家が、育ちも行儀も良い彼女たちがもつ無秩序や残酷さを顕わにしつつエロチックな視線を加えて描いた女子校物語の紹介は新鮮であった。イメージあるいは表象としてのパブリック・スクール物語における女生徒は、これからさらなる研究対象となり得るであろう。

第5章と第6章では、疑似パブリック・スクールとしてのグラマー・スクールや、対極に位置するコンプリヘンシヴ・スクールについて、それぞれのイメージを取りあげて解説がなされており、相関的にパブリック・スクールおよびそのイメージが立体化される。パブリック・スクールに限らず教育機関に関するイメージが、小説・ドラマ・映画等の媒体を通じて流布されることで現実に一定の効果をもたらしていることが良く伝わる書き方となっている。

本書評では、イメージ研究としての本書を評価してきたが、最後に本書がパブリック・スクールそのものについての日本語による最高の手引書ともなっていることも強調しておきたい。学校生活における言葉遣いや習慣が詳細に記されているのである。往年の読者たちはそうした知識を喜んで知りたがっていたし、本書を読めばわかる通り、そうした細部にこそ階級の違いが表れる。こうした点でも、本書は教育や階級に関する研究に必携の書となっている。また、パブリック・スクールといえばトム・ブラウンから第二次大戦辺りやさらに時代を下ってもサッチャー時代までしか焦点が当てられなかったイギリス研究において、その視野を現代に至るまで広げた点も評価されるべきであろう。

——東洋大学准教授